

2007年11月19日

第22回

農業水利システムをめぐる公・共・私

昨年の夏のことであった。「ここでは田越しかんがいをしていないのですね」と小田切徳美君（明治大学教授）が言った。中国 江蘇省句容市の水田地帯の農村でのことで「句容市農業農村発展戦略計画」の策定のための基礎調査を行っていた時のことである。私は彼の観察力の鋭さを誉めるとともに、私の中国での調査の印象を改めて回顧してみた。

私が初めて中国を訪れたのは、今から28年前の1979年夏のことで、人民公社の解体、個別農家請負制へと移行しつつあった時であった。上海近郊の水田地帯で水路（クリーク）から水田にポンプで汲み上げて入れている姿を見て「生産隊の共同活動の一環ですか」と聞いたら、「水田の利用権は個人に分割され、自分の田に水を入れている」という答えであった。「隣りの人の田にも水を入れてあげるのですか」と聞くと「いや、個人ごとにやるのだ」という答えがもどってきた。この時、上海の他の地区（野菜が主力の地帯だったが）でも同様の質問をくり返したが、同じ答えがもどってきた。要するに「我田引水」である。その後随分多くの機会を得て中国の水田地帯を訪ねたが、雲南省の棚田地帯で農業水利施設（用水路、分水施設等）の共同管理、用水の共同利用の事例に接した以外、平地水田地帯での共同管理、共同利用の典型事例に出会った経験は無い。棚田地帯では必然的なことで、インドネシアのバリ島のスバックでは、雲南省の事例と同様な実態を詳しく調査したことがある。中国での用水利用慣行についての文献もいまのところ手に入れていないので、もし、御存じの方がいたら是非教えてもらいたいと願っている。

我田引水

「我田引水」という言葉を『広辞苑』で引いてみると「自分の田に水を引く意で自分の利益になるように、物事を引きつけていったりまたはしたりすること」と書かれている。かねてよりわが国の農村では、我田引水ということは、倫理上も社会規範のうえからもきびしく非難、排除される行為とされてきた。

水のもつ希少性、重要性のうえに、公共性、社会性、倫理性がきびしく求められたのである。とりわけ分散錯圃（ぶんさんさくほ）という水田所有の実態の中で、かつ稲作を基幹とする日本農村では、以上のことが根底にあった。

『水利の社会構造』（国際連合大学、東京大学出版会、1984. 11）を読む

公・共・私の問題を考えるうえで、水問題をめぐる国際比較研究を行った本書を顧みておくことは重要であると考えるので、まず、その総括部分をここで紹介しておきたい。この研究は国際連合大学からアジア経済研究所が委嘱された「技術の移転・変容・開発——日本の経験」プロジェクト（1978—1982年実施）の一部「技術と農村社会」の研究成果を総括し刊行したものである。この研究に参加された多数の多分野の研究者、現地調査地などにまつわるエピソードは多いが、それらは次回に回し、私の書いた総括部分の要点の一部を、少し長くなるが紹介しておきたい。

まず、アジアの途上国の農業水利と農業水利開発の特徴を次のように総括した。

「①灌漑水利開発の主体が圧倒的に国または公共セクターであり、中央集権的システムがとられていること、②こうした公共セクターの灌漑投資は伝統的地域性のある灌漑施設を代替するかたちで行われていること、③灌漑投資は、肥沃な優等地に対し重点的に、より高い生産性の向上を求めて投下される傾向にあり、その結果、地域間、階層間の生産性格差を拡大していること、④公共セクターによる中央集権的、官僚的用水管理が支配的となり、村落共同体のもつ伝統的、主体的用水管理機能が縮小しつつあること、などにその特徴がみられる。積極的に灌漑開発が行われている場合にも、その成果が充分発揮されていないのは、以上のような要因にもとづく場合が多いものと推論できよう」（本書310頁）

このようなアジアの途上国の実態に対して、「日本の経験とその意義」について引き続き総括しているのであるが、それは次回に述べることにしよう。